アメリカ留学Q＆A

最近よくある質問(2)

Q 質問

大学卒業後、就職せずに、すぐロースクール（法律大学院）かビジネススクール（経営大学院）に留学したいと考えています。就職した経験がないと不利だと聞いたことがありますが、どうなのでしょうか？

A 回答

最近、大学を卒業後、就職しないで、そのままアメリカの大学院に留学したいと考えている方が、増えてきているように思います。昨今の経済不況による就職難や、近年の企業のグローバル人材採用により、語学力、異文化体験を積んで就職の際自分の付加価値を高めたいという傾向が、学生さんの側にもあるのかもしれません。
しかしながら、理想と現実のミスマッチに苦しんでいる方も多いのではないか、と危惧しています。

１）アメリカの大学院（修士課程）の仕組み

アメリカの大学院は、一般的に、①アカデミックな学際分野の学術系大学院（Graduate School)と②専門職養成を旨とする専門職系大学院(Professional School)に大別されます（「修士課程」　参照）。

前者は、伝統的な人文社会や理工系での分野で、後者は法律、経営、医学、建築など実践的知識や専門技術が問われる特定の分野が対象とされます。学術系大学院では、博士号（Ph.D.）が最高学位であるのに対し、専門職系大学院は、ターミナルマスター（Terminal Master）と呼ばれ、修士課程（Master）で終了することが一般的です。

日本の大学院修士課程入学には、一般的に修士課程での専攻と同分野の学士号を保持し、かつ大学院入学試験に受かることが求められます。

一方、アメリカの大学院入学審査（Admission)は、全て書類審査*となります（*「出願書類の準備」参照）。また、アメリカの修士課程は、コースワーク（科目履修）主体で構成されたカリキュラムとなっており、基礎から応用までしっかり学ぶため、学士/学部課程の専門分野と異なる分野での進学も比較的可能となっています(Pre-requisiteと呼ばれる基礎科目の履修が要求されている場合を除く)。アメリカの

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

大学院は、学士/学部課程での専門を問わない代わりに、社会での実績や経験を入学審査の評価材料とすることが多いのです。

２）専門職系大学院（Professional School）

入学審査要件（Admission requirements)に職務経験を問う専門職系大学院(Professional School)プログラムの代表格として、ロースクール（法律大学院）とビジネススクール（経営大学院）があげられます。多くのロースクール（法律大学院）やビジネススクール（経営大学院）は、入学基準要件として、学業成績に加えて「最低2～3年以上の職業経験が必須」と明記しています。専門職系大学院（Professional School)は、日本でいう社会人大学院を想起していただくと分かりやすいかもしれません。

学生と社会人の違いは、”社会の現場でいかに責任を任されてそれをどのようにこなしてきたかを、いかに具体的に自分の体験から語れるかどうか”であり、アメリカの専門職系大学院（Professional School)では、そのような経験者をなるべく多種多様に集め、いかにクラスで貢献させるかに心を砕いています。アメリカの大学院学生のプロファイルにも、それを裏付けるような統計、有職率：87.1%、幅広い年齢層－25歳以下：18.3%、25歳以上40歳以下：58.9%、40歳以上：21.9%（”Total fall enrollment in degree-granting institutions, by level of enrollment, sex, age and attendance status of student:2007”, Digest of Education Statistics 2009 参照）がありますが、特に、事例研究（Case study）を重んじるロースクール（法律大学院）とビジネススクール（経営大学院）ではその傾向が顕著です。

３）ミスマッチの危険性

もちろん、多種多様の中には、大学卒業後すぐで就労経験のない人材も含まれる、といえなくはないかもしれません。また、専門職系大学院（Professional School)にも市場原理は働いていますので、ビジネススクール（経営大学院）の中には、就労経験のない新卒学生でも受入れる大学もあります（※リーマンショック後、しばらく続いた世界不況の影響で、アメリカ人の大学院進学が落ち込んだという説もあります)。しかし、ビジネスも法学も、分野自体が社会と直結しており、極めて実学的である以上、社会人を何年か経験した人材の発言は必然的に重みと説得力があり、問題解決の示唆に富んでいます。そのような、確かな経験に基づく意見が飛び交うクラスの中で、就労経験のない学生はどうしても受け身的になり、発言できず縮こまってしまう、という現象も起きるでしょう。すると、社会人経験がない出願者は、結果的にクラスに貢献することが少ない人材として、「まだ早い」と入学審査官に見なされてしまいがちである、ということは否めないでしょう。もちろん、大学院のポリシーは大学毎に異なり、新卒学生を受入れる大学院もあるので、一概に断じることはできません。また、新卒学生であっても在学中に起業し学業と平行して就労経験がある学生など、例外もあることでしょう。

しかし、社会で起こりうる様々な問題を想定し、その問題解決の能力を高める、ということを趣旨にする専門職系大学院（Professional School)では、社会人経験の有

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

無は大学院に進むステップとして必要または重要とみなしているところが多いともいえるでしょう。また、同じ専門職系大学院（Professional School)でも、ビジネスと法学は別の専門分野ですので、それぞれ異なる専門性や知識、能力が要求されると考えましょう。

“社会に出るためにロースクール（法律大学院）やビジネススクール（経営大学院）に留学したい”と思っているとしたら、それは逆で、”ロースクール（法律大学院）やビジネススクール(経営大学院)に入学するには社会人経験を経なければならない”という逆転が起きていることになり、入学審査官から見るとミスマッチが起きていることになります。

４）終わりにーキャリアデザインの視点

自分の力を伸ばすために、大学院に留学したいと考える熱意と向上心は大変貴重なものですが、ミスマッチを起こさないためには、ものごとを正しく認識し、適切に判断し、行動することが求められます。自分の能力を客観的にとらえ、相手が求めているものとの整合性を判断し、決断に伴うメリット・デメリットを理解した上で、目標を定めて行動する。そこには、今の自分に足りない能力をおぎなうための努力の時間も含まれるでしょう。

しかし、日本では、アメリカと違って、一旦就職してしまうと、企業派遣でもない限り、一度キャリアを中断して大学院に留学するというのは、なかなか難しい選択であるということも事実です。いつのタイミングで留学するか、ということも自分の人生計画の中で、重要な判断になるでしょう。

大学院以上の留学は、自分の人生のキャリアの方向性を決める重要なステップとなります。貴重な時間と経費と労力を投資する以上、大学院留学には、キャリアデザインの視点が重要といえるのではないでしょうか。自分がどのように生きていきたいか、という長期的なライフデザインを考え、それを中・短期的なキャリアプランに落とし、キャリアプランを実現するための具体的な行動目標をたてて、多方面から留学の必要性を検討する作業ーなぜいま自分が大学院に行く必要があるのかということを、様々な角度からよく検討してください。十分な思慮と将来への展望および目算がたったならば、最後には跳ぶ勇気が必要でしょう。

留学の形態に正解はありません。各々が、自分の留学目的を持ち、自分の出来る範囲で、自分のタイミングで留学を決行しています。しかし、自分流を貫くあまり、理想と現実のミスマッチに巻き込まれることがないように、また、留学をしたことで自分の未来を阻害することにならないように、願っています。留学が自分の人生にプラスになりますように。

フルブライト・ジャパン（日米教育委員会）留学情報サービス
シニア留学情報アドバイザー　**笹田　千鶴**
Chizuru Sasada

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.